

SIP川口 NEWS

南三陸町「歌津地区」復興支援号

川口新郷工業団地協同組合 川口市本蓮4丁目 3-38 2011.8.1 発行
TEL. (048)285-1766 URL: <http://www.shingou.or.jp>



石川理事長と私たちの支援アクション！



ここで記念写真を撮っているのか……と躊躇する思いはあったが、現況を伝えるために、あえて被写体に収まった。

●「がんばろう東北」じゃないと思う。

●瀬戸内寂聴さんが言っていた。

「がんばろう東北と言うけれど、それを言うのは何か違う。被災地のみなさんはもう充分にがんばっているのだから。何か酷な気がする」と。

わたしも同感である。被災者自身が言うのはいいが、日本中に響き渡るこの言葉に違和感を覚えていた。

●「がんばろう日本」も「がんばろう東北」も空に向かってカラ元気を吐いているようで、何をどう頑張るかがあいまいだ。オリンピックのスローガンじゃあるまいし、はたから声援だけ送っても困るし、節電だけががんばられても困る。そして、被災者に言っても自力で再生できる範囲を超えているのだ。

●この言葉からイメージするものは、『KYでにやけた笑顔でポーズを取る菅直人』的な欺瞞と空虚しか浮かばないのは私だけだろうか。

もしスローガンを付けるのなら、

「助けよう、一人ひとりが」と私は言いたい。

金を絞りだし、汗を絞りだし、知恵を絞りだし、きちんとした支援を届けてナンボである。援助の手が被災者と結ばれたとき、はじめて糸偏に半分ずつと書く「絆」という言葉を使う資格があると思う。

今の政治家は軽すぎて、選ぶ言葉も嘘くさいのだ。私達は被災地に何と何を具体的にしたのか。そして役に立ったのか。こういう自問自答が必要だと思う。

●何をはじめたのが[SIP川口]

●石川理事長が率いるSIP川口(新郷工業団地)。私たちのしたことをおさらいしたい。

まず金を絞り出したのだ。ちょうど組合員へ渡す還付金があり、「その半分を義援金に！」というお願いを組合員にしたのだ。どこの組織でも会社でもそうだけ

れど、こういうものには異論が必ず出る。「還付金から寄せという強制はよくない」という意見だ。

しかしこれはあくまでもお願いである。それを強制と感ずるかどうかは、受け手の問題であるということ意見をまとめた。

次に、還付金の半分が高額になる会社もあり、あまりに高額の場合は「10万円を限度に…」という意見もあったが、「好意に上限は必要ない。自由意思に任せよう」という声でまとまった。まずは組合と組合員がお金を出し合い300万円を目標に義援金を送る事になっている。

●次に汗も絞った。富澤さん率いる組合の蕎麦打ち会の有志は、避難所に手打ち蕎麦の『炊き出し』に出かけた。場所は市内の西スポーツセンター。5月を迎えて避難所の被災者の数は減り、わずか50食の炊き出しだったけれど、体を使い、汗をかき、すぐ動くというクセを自分達に課したのだ。

●そして知恵も絞った。組合の旅行も東北へ舵を切った。ブロック毎の春の旅行は岩手に行った。そして組合全体で行く秋の旅行も東北で準備をしている。

●さらに、組合の会館を臨時避難所にすべく、寝具の用意と備蓄食の用意も始めている。

しかし食糧には消費期限があるので、組合の夏まつりである『ばんばん祭』で、その備蓄食を使った『びちく井まつり』も計画している。入れ替えの食糧を祭りで見みなさんに食べていただき、備蓄の重要性を伝え、みんなで炊き出しの演習もしようというのが目的だ。



今年で5年目の住工共生祭り

●アクションはまだまだある。

組合で被災者の総合就職受け入れも決めた。各社合計で26名の受け入れを決めた。

さらに、組合は共同受電で運営をしているので、組

合全体の節電対策を決めた。営業日を振替える平日休業、製造設備の一部休止、エアコン・照明の一部不使用などを実行している。これはNHKの番組『Biz スポ』も取材に来たほどの真剣な取り組みである。

●私たちはありとあらゆる、金を絞りだし、汗を絞りだし、知恵を絞りだして、がんばっているつもりであるが、「がんばろう日本」の旗印の下動いているんじゃない。「助けよう、一人ひとりも、組合も、より具体的に」という想いからである。

これが“チーム石川”の面目躍如である。

●以上が前置き、次が本論。

●前置きが大変長くなったが、私達が次に起こしたアクションを伝えるためにこのレポートを書いている。

●未曾有の災害で、どの組合企業も業績が落ちている。しかも製造の頼みの電力がままならないので未来は深刻である。これは全国民が同じである。しかし我々は被災をしていない。工場も動き、帰る家もあり、家族も待っている。何も失っていないのだ。

失っていない人が、失った人をどう助けるのか。これが被災していない者の責務だと思う。

●「次に何ができるか?」。我等の石川理事長が打ち出したテーマのは『顔の見える長期的支援』だった。つまりこういうことだ。

義援金を赤十字に送るのも大切だがこれは顔の见えない支援である。これとは別に、私たち自身がある場所に出向き直接交流をしながら、長い時間をかけて役に立って行きたい。その町の復興を10年かけて一緒ににつくって行きたい。こういう新機軸であった。

●選んだのは「南三陸町・歌津地区」。

●『私たち組合が東北に新しい故郷をつくり、絆を結び、長期的な支援をする』その地に選んだのは宮城県南三陸町歌津地区である。

「なぜ歌津を?」短くまとめるとこういう話である。

●じつは、同じ南三陸町の志津川地区がこの津波でもっとも有名になった場所だった。鉄骨だけになった防災対策庁舎。屋上には、指揮を取っていた町長

がいた。津波の高さが20メートルを越える中、町長はフェンスに掴まり一命を取り留めたのだ。他にも志津川病院には4階まで津波が押し寄せたことや、他の大変悲しいことを、テレビでは真っ先に取り上げた。また、地元の阿部長商店は800人の社員を一人も解雇せず再建を目指す、というニュースもあった。

●つまり、この津波でもっとも注目を集めたのが南三陸町の志津川地区だった。しかし同じ南三陸町には、合併したもう一つの地区、歌津地区もある。

里山一つ越した入江の地区だが、道路は分断され災害直後からこの歌津地区の情報が入らず心配された地区だった。そして、あまりにも志津川地区の映像や情報が鮮烈だったので、南三陸町と言えば、志津川となり、陰に隠れて注目を集めない地区になっていた。

●するとどうなるか…。多くの取材や、支援物資は志津川に集中し、歌津には光が当たらないことになる。一途の光と言えば、天皇皇后両陛下が初めての被災地慰問の地に、この歌津を選んでくださったこと。しかし名誉だけでは復興はできない。そして国の動きもあまりにも遅い。

●歌津は自分の力で未来を拓く!と、『すばらしい歌津をつくる協議会』(会長・小野寺寛さん)が立ち上がり、オリジナルのグッズも開発。自力での復興支援キャラバンをはじめたのだ。そして川口市にも挨拶に見え、川口観光協会専務理事の瀬瀬氏にも話があった。敏速な瀬瀬氏が川口の要人に話を結び、我が石川理事長がいち早く動いた。こういう展開だ。

●ばんばん祭で「歌津支援」を打ち出せ。

●私たち“チーム石川”はいつも動きが早い。話を聞いてすぐの7月5日に、石川理事長、矢野総務委員長、荻山事業委員長、そして私(企画委員長兼ばんばん祭担当責任者)と、事務局の田中さんの一行5人は仙台に向かった。

午前中は、もう一つの懸案事項である被災者就職の打ち合わせのため、仙台のハローワークへ。組合として仙台での集団面接会の可能性を探り、午後からは歌津に入った。

●歌津での打ち合わせは、組合の夏まつり「ばんばん祭」に歌津の皆様を招聘するためだ。といっても歌津に行く気仙沼線は木っ端みじんに破壊されている。まったく復旧絶望の状態だ。

私たちは、新幹線で「くりこま高原」まで行き、そこからジャンボタクシーで2時間かけて向かったのだ。

●打ち合わせをした歌津中学校の校庭には銭湯もあった。自衛隊がつくったものかと聞いてみたら、ボランティアの皆さんの手によるものだとか。初めて中を見せてもらったが、魚を入れる大きなボックスが浴槽。こういう生活をまだまだおくらなければならない。

校舎に入ると、壁の大きな亀裂が痛々しく、そこにガムテープが貼ってある。骨折した体にバンドエイドを貼ったようなものだ。もし次の地震が来たら、この校舎は持ちこたえないかもしれないが、この校舎を使うしかないのが現状なのである。



ボランティアの皆さんが作った仮設浴場。蛇口もシャワーもない。

●歌津をつくる協議会の皆さんと共に。

●『すばらしい歌津をつくる協議会』会長の小野寺寛さんと名刺交換をし、同席した2人の若い方とも名刺交換をする。神田篤司さんは桐生の方で、織物会社の社長さん。牧島さんは伊勢崎の方で群馬県の職業能力開発協会の主任さん。立場も違い、県も違う方が、歌津に集結して頑張っておられるのだ。

●歌津地区の総面積の内、平地は3割しかない。ここに住宅が密集し、その住宅が壊滅したのだ。しかも勢いを増し伊里前川へと遡った津波は、山間の集落までを襲った。

(この津波で川を上り、8キロ先まで津波が押し寄せた地区もあったとか。8キロと言えば、川口から浦和まで行く。まさかここまでは…の距離だ)。

すべては消え失せたのだ。今、復興計画を立てるにあたり、国の予算とプランのままですと、結局中途半端な復興整備しかできない。だから自力で資金を集め、素晴らしい景観や恵まれた海の幸を守りなが



小野寺会長と打ち合わせ
右から小野寺会長・神田氏・牧島氏

ら、子供達の未来へこのすばらしい歌津をつなげるために頑張っていると小野寺さんは話してくれた。「復興には子供達の世代まで数十年がかかるでしょう。しかし、基本計画を立て着手するここ1、2年で、どういう形かが全て決まってしまうんです。国任せのハンパなこと、安普請の計画はしたくない」と話す。

●私たちは、来る前に用意してきたプランがあった。ひとつに歌津支援グッズの購入である。ウチワは2千本購入し、ばんばん祭のお客様に配る予定だ。Tシャツはスタッフの分3百枚を購入し、これは事前に配る予定だ。

さらに「震災復興クジ」を発行することも決めていた。クジは1枚100円。お子さんにも買える値段だ。大人には10枚ずつは買ってもらいたい。1万枚売れば100万円になる。クジの景品は、ご当地のホテル宿泊券や特産品を組合が用意する。こういう段取りだ。

●協議会の皆さんとの打ち合わせで、さらに追加したい企画の予定は下記のものだった。

- ①舞台での挨拶かアトラクション(郷土芸能の方は、今はまだそういう気持ちになれず難しいと言う)。
- ②復興支援オリジナルグッズの売店。
- ③南三陸の特産品の売店。
- ④地元の漁師による鮪の解体ショー。

しかし、何人来てもらえるかで企画が変わる。ばんばん祭は8月21日(日)の予定。東北では次の日が学校の始業式だし、全国の他の地区へのキャラバンも

あり、これからの調整だということになった。

●南三陸町には『ホテル観洋』という東北一の年間宿泊客数を誇るホテルがある。幸いにも津波の被害はほんの少しで済み、津波後いちばん早く被災者に



右が4階まで津波が来た志津川病院。
左が鉄骨だけになった防災対策庁舎。
4ヶ月経つてもガレキが片付かない

ホテルを解放したのは有名な話だ。その親会社が前述した阿部長商店。800人の従業員を一人も解雇せずに頑張っている会社だ。私達はここも訪れて「復興クジ」の特賞景品の打ち合わせをした。

●そして石川理事長の頭では、秋の旅行にこのホテルを組み入れることを考えはじめたようだった。

“来てもらったのなら、今度は行く”

これで糸が半分ずつ。“絆”となるのだ。

私の頭の中ではイメージはさらに進み、歌津に組合の保養所を建ててはどうかと思っている。海の幸に恵まれ風光明媚な場所に小さな別荘を建て、組合員が利用する。そうすれば歌津は新郷の第二の故郷になる。ずっと復興を手伝い、見守ってもいける。そんなことを思いながらの帰路だった。地震と津波で傷だらけになったデコボコ道を、大きくパウンドするジャンボタクシーに揺られながら、遠い未来を想いながら、今をどう固めると段取りを考えていた。

何度も言うが、オリンピックの応援歌のような

「がんばろう日本」ではすまされない。

「助けよう、一人ひとりが」である。

地震と津波と原発と悪政で、瀕死の重傷を負っている日本を、一人ひとりの力でどうするかなんだ。

今日、松本龍復興大臣が辞任した。もたついていた政治もいかげん終わりにして、今日をこの大震災のどん底にしたい。

(2011/07/06 小林玖仁男)